

人口・食料問題での地図・地図帳活用の事例

神奈川県立金沢総合高等学校 大胡 秀行

はじめに

先日、教育再生会議で、ある委員が中学校の地理の教科書を取り上げていた記事が新聞に掲載されていた。内容をご存知のことと思うが、取り上げている地域や地名の量的な課題であった。

私も地理の担当として苦慮しているが、このような中学校での学習歴の状況から、これを生徒の学力の低下と一括りにはできないと考える。本稿では、地理Aの地理学習『人口・食料問題』を地球的課題から考察する単元で、地図や地図帳を積極的に活用した事例を記す。これは、高校での地理の授業をはじめて学ぶ生徒が対象であり、また内容的にも現代社会等でも活用できる内容である。

1. 地図や地図帳の有用性

生徒にとって地図理解が必要なことはいうまでもないが、地名・地理的知識習得の脆弱性の問題が、地図帳の活用方法に凝縮されていると直感的に感じている。

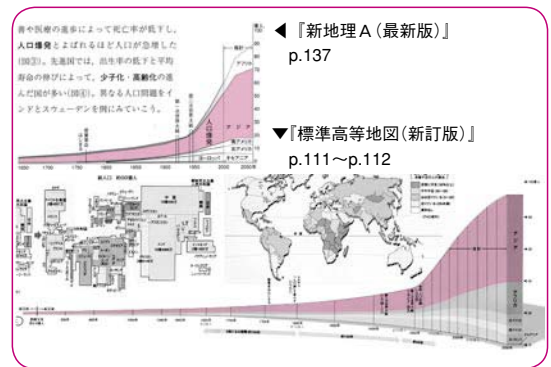
既知のことであると考え、手元の資料（『中学校 地図・地理のしおり』特別号 Vol.1 帝国書院 2005）に、中学生の国名認知度の報告がある。これによれば、オーストラリア・中国・アメリカ等の比較的一般的な国名とその位置の正答率が7割で、本稿に取り上げるインドでは5割程度となり、さらにナイジェリア・スウェーデン・バンラディシュなどの正答率の低さは想像にたやすい。

ここにも今日的な地理学習の課題が顕在化している。地理的な基礎知識の欠落した生徒に地理的な認識をつけ、地球的な課題にまで発展させる学習を行うためには、授業での地図・地図帳の積極的な活用が有用であると考え。

2. 発展途上国の人口問題

ここでは人口問題を中心に報告させていただくが、この単元では世界の各国・地域で様々な課題があることに着目させる。さらにその要因を考察させ、地球的課題として様々な事項が相互に影響し、複雑に関連している点にも留意させる。

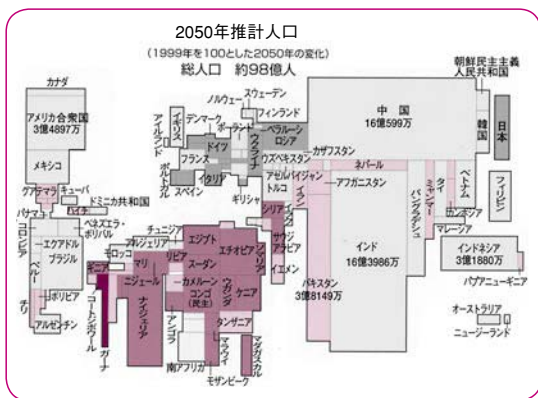
人口増加という量的な課題について『高等学校新地理A（最新版）』（以下教科書）p.137③「世界の人口推移」の図がある。同様な図は『標準高等地図（新訂版）』（以下標高図）p.111～112に「地域別人口の変化」として見開きページで掲載されておりこちらのほうがより視覚的である（図1）。



（図1）同縮小率の「人口の推移」グラフの比較

図1から、第二次世界大戦後の人口爆発を要因とする時系列的な変化が理解できる。さらに、人口爆発が発展途上国の人口増加が主であり、とくに中国とインドのアジアが多くを占めるという事実を、次頁の図2からも理解させることができる。

途上国の人口問題の事例としては、教科書p.137写真②「人口増加が著しい発展途上国」を使い、ナイジェリア・ラゴスのプライメートシティ（首位都市）として一極集中する現状を、課題として示すことができる。農村部の過剰人口が、食料や雇用機会を求めて都市へ移動するという発展途上国の動向についてもふれ、単元5の「世界の都市・居住問題」（教科書p.145～）へと発展させることもできる。



(図2)『標準高等地図(新訂版)』p.111②

ここでも、ナイジェリアのラゴスやメキシコなどについてふれた場合は、地図帳の一般図で当該国や都市の位置など、また周辺の国々にも確認させることが前段でふれたように中学の学習歴をふまえると必要であると痛感している。アフリカの一般図(標高図p.30)により国名や都市名を確認し、周辺国でも同様な問題が発生しているにも言及している。

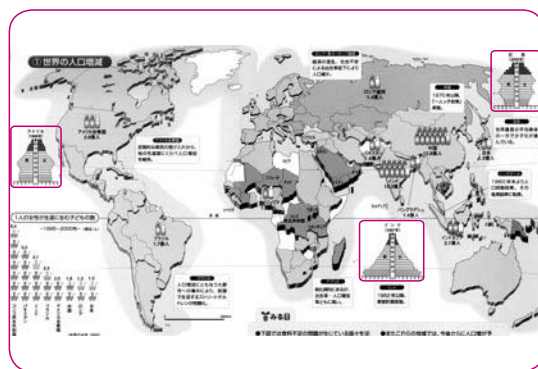
教科書では人口問題の量的な課題としてインドを取り上げている。インドの事例では、とくに貧困の克服のために子どもを労働力ととらえ、若年から様々な手段で働かせなくてはならない経済的な背景の存在をおさえる。老後の保障もない貧しい家庭では、幼児死亡率の高さもあり、将来の生活の支えとなる男児の確保が重視されている。さらに農村部などでは、女性が比較的若い年齢で結婚することが長い妊娠可能期間をもたらしている。つまり、このような経済的な格差が、この量的な課題の核心である多産の原因であることに留意する。

一般的に発展途上国では、人口の動態が多産多死から少産少死へ変換する「人口転換」の過程で、死亡率の減少が出生率に先行することからおきた人口爆発が深刻な問題となることが予想される。図3から、インドでも同様の問題がおこると思われる。さらに、インドのような人口規模の大きな農業国では、その経済的な影響も大きい。

1970年代、強権政治による避妊などの政策が失敗したインドでは、60年代の急増期に出生した子

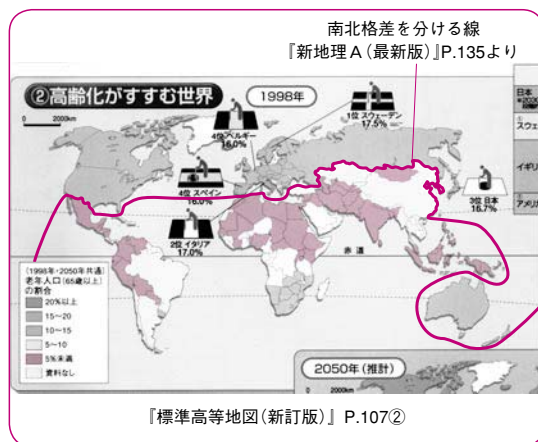
どもが再生産年齢に達したため、80年代も増加が継続した。さらに量的な課題については、人口数や人口密度、都市人口の急増などを統計(標高図p.120~122)で確認するなど、必要に応じて内容を発展できる。

教科書p.138~139の②インドの人口ピラミッドと⑦スウェーデンの人口ピラミッドを比較すると、富士山型から釣鐘型に変化し、多産多死から多産少死を経て少産少死へと変化している。とくに都市部の高所得者などでは出生率の低下が顕著であることも確認できる。標高図には図3のように、アメリカや日本のものもあるので比較してみるとよい。



(図3)『標準高等地図(新訂版)』p.111~112

3. 先進国の人口問題

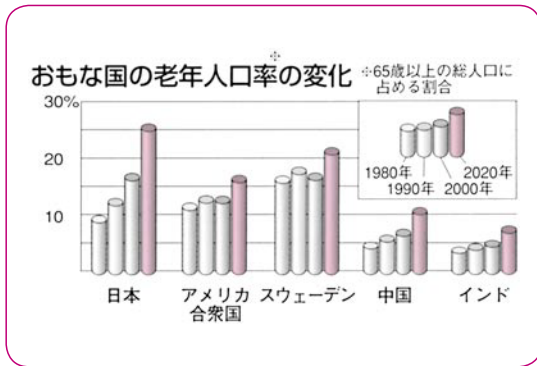


(図4) 老年人口割合と南北格差

図4からは、先進国ではスウェーデンや日本の例のように高齢化がすすんでいることが確認できる。さらに図4に、教科書p.135③1人あたりの国内総生産(ベース表現はGDP)の地図にお

る“南北格差を分ける線”と重ね合わせると、老年人口の割合と経済的な格差の相関関係がよく理解できる。この割合がヨーロッパの国々では、国連の“高齢化がすすんでいる社会”の基準である7%はもとより、14%以上の『高齢社会』となる国々が多く見られる。

しかし、スウェーデンが高齢化に100年以上の時間をかけ、徐々に福祉国家として対応したのに対し、急速に進んだ日本の高齢化は内容が異なるのがわかる。図5でもここ40年間の変化を読むことができる。



(図5) 『標準高等地図(新訂版)』 p.107

このように、先進国は出生率の低下や平均寿命の伸びにより、急速な高齢化社会を迎えていることを生徒に示すことができる。スウェーデンでは社会保障制度の整備や女性の社会進出、高福祉、高負担などの現状が、高齢化社会を支えている。筆者が数年前に訪れたときに、女性も働く、働ける、働かざるを得ないという国民生活を確認することができた。さらには住環境など豊かな国土も実感できた。

4. 食料問題

途上国の食料問題の要因は人口の急増だけでない、経済格差や南北問題、配分の不公正・不平等などから世界人口の約1割の人々が必要栄養量を満たせない状況にある。

バングラディッシュの食料事情ではさらに自然環境の影響を色濃くしている。ここでも、標高図 p.24の一般図でバングラディッシュの位置とガンジス川のデルタ地形を確認させ、毎年の洪水に

よる被害が深刻であることが理解できる。標高図 p.89㊦「ガンジスデルタ」の図からも、デルタでの水田とマングローブなど低湿地での土地利用がわかる。

モンスーンの気候とデルタの地形と作物の栽培の相関関係を理解する。教科書p.70の「人々の生活と気候」の単元で「バングラディッシュの気候と生活」(図6)により、雨季と乾季による土地利用の工夫が理解できる。さらに農業カレンダーや乾季と雨季の写真を比較することも有効である。



(図6) 『高等学校 新地理A(最新版)』 p.70

バングラディッシュは、世界第3位の米の生産国だが世界第1位の米の輸入国でもあり、さらに商品作物としてのジュートの生産が重視され、食料の援助を受けているのが現状である。このように、発展途上国では外貨獲得のため輸出優先の生産システムとなり、その結果、自国の食料が不足し、先進国側からも余剰の農産物の輸出や援助を続けているという、偏った経済となってしまうのである。

おわりに

本稿では、先進国の食料問題を取り上げることではできなかったが、食料消費の偏在や発展途上国での食料自給率の向上のための支援など多面的な課題がある。このテーマは現代社会の授業においても、現代の課題や国際社会の課題などの対象ともなり、この過程で地図や地図帳の導入を工夫する必要を昨今強く感じている。